

## 戦争後 長崎にて

2020年11月27日(金)

1945年8月9日午前11時02分、実戦で使われた人類史上二発目の核兵器・原子爆弾が長崎市へ投下されました。

この一発の兵器により当時の長崎市の人口24万人(推定)のうち約7万4千人が死没、建物は約36%が全焼または半壊しました。

長崎原爆はプルトニウム239を使用する原子爆弾で、広島に投下されたウラン235の原爆「リトルボーイ」の1.5倍の威力であったといわれています。

私は、とても暗い気持ちで長崎原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、そして平和公園を訪れました。

長崎原爆資料館では被爆の惨状をはじめ原爆が投下されるに至った経過、被爆から現在までの長崎の復興の様子、核兵器開発の歴史、そして核兵器のない平和希求までストーリーを持たせわかりやすく展示されています。

私、被災された方々の写真を観て、思わず涙してしまいました。

<https://nabmuseum.jp/genbaku/tenji/>

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館は原子爆弾の投下により亡くなられたすべての方々への追悼と平和祈念を行う場所です。

原爆死没者名簿登載者数 185,982 名

(令和2年8月9日現在)

私は、原爆死没者名簿を拝見した時、胸がえぐられる様な痛みを感じました。

<https://www.peace-nagasaki.go.jp/>

平和公園は「願いのゾーン」「祈りのゾーン」「学びのゾーン」からなる平和公園は、二度と戦争を起こさないという誓いと、世界平和への願いをこめた公園です。私、平和祈念像には祈らずにはおられませんでした。

<https://www.city.nagasaki.lg.jp/heiwa/3030000/3030100/p005151.html>

原爆で被災された方々に、心からご冥福をお祈り申し上げます。



そして、長崎原爆資料館では、右記の写真と書籍に出会います。この写真は、長崎原爆資料館の展示物の中で最後の最後に、展示されていました。

私は、この少年から何かオーラの様なものを感じました。それは、何か神聖な人間の気高さを感じたのです。

<http://www.kirishin.com/2019/11/22/39020/>

そして、帰途の飛行機の中で  
“『焼き場に立つ少年』は何処へ 吉岡栄二郎著 長崎新聞社”  
を熟読しました。

本書は、『焼き場に立つ少年』について2007年より2012年の5年の期間にわたり長崎で行った調査の報告です。

冒頭、第二次世界大戦後アメリカ軍の海兵隊員として長崎県佐世保港に上陸し、この撮影したショー・オダネル氏のインタビューから始まります。

『佐世保から長崎に入った私は、小高い丘の上から下を眺めていました。すると白いマスクをかけた男たちが眼に入りました。男たちは60cmほどの深さにえぐった穴のそばで作業をしていました。荷車に山積みにした死体を石炭の燃える穴の中に次々と入れていたのです。

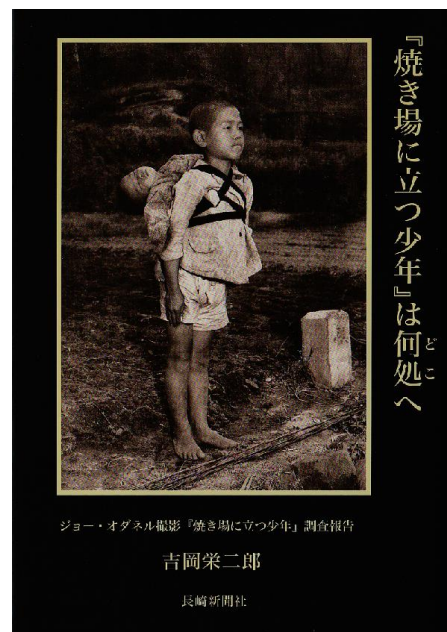
10歳くらいの少年が歩いて来るのが目に留まりました。おんぶひもをたすきにかけて、幼子を背中にしょっています。弟や妹をおんぶしたまま、広っぱで遊んでいる子供の姿は当時の日本でよく目にする光景でした。しかし、この少年の様子ははっきりと違ってきます。重大な目的を持ってこの火葬場にやってきたという強い意志が感じられました。しかも足は裸足です。少年は火葬場の淵までくると、かたい表情で目をこらして立ちつくしています。背中の赤ん坊はぐっすりと眠っているのか、首を後ろにのけぞらせたままです。

少年は火葬場のふちに、5分か10分も立っていたでしょうか。白いマスクの男たちがおもむろに近づき、ゆっくりとおんぶひもを解き始めました。このとき私は、背中の幼子がすでに死んでいることに初めて気づきました。男たちは幼子の手と足を持つとゆっくりと葬るように、火葬場の熱い灰の上に横たえました。幼い肉体が火に溶けるジュウという音がしました。それから、まばゆいほどの炎がさっと舞い立ちました。真っ赤な炎は、直立不動の少年のまだあどけない頬を赤く照らしました。

その時です、炎を食い入るように見つめる少年の唇に血がにじんでいるのに気がついたのは。あまりにきつく噛みしめているため、唇の血は流れることなく、ただ少年の下唇に赤くにじんでいました。夕日のような炎が静まると、少年はくるりときびすを返し、沈黙のまま去っていきました。

朝日新聞社1999年(インタビュー・上田勢子)』

本書を読み進めていくと、その少年の唇に血がにじんでいた理由は大きな悲しみを涙を出さずこらえるためにきつく唇をかみしめていたことを知りました。



あとがきで以下のことが語られています。

『文筆家の轡田隆史氏は「神はこの一枚の写真を人間に撮らせるために、人間に戦争を与えたまいしか？」と語っている。(朝日新聞「忘れない」1999年6月9日)

この一枚の写真の尊さは、写された特定の場所や人にあるのではなく、時間を超越した“象徴的な含意”にあると云うことである。すなわち20世紀の最も残虐な人間の歴史を経験した原爆の地・長崎で写されたと云う事のみでなく、死んだ弟を岸辺の火葬場に運ぶたいけな少年の姿から、天使よりも凜とした人間の心の温かさと愛を、そして神とは、戦争とは、人間の存在とはという本源的な問いに思いが募るのだ。

私たちはこの沈黙の一葉を、悲慘な思いの戦争の記念碑的存在として未来に語り継ぐことを心に留めて行くべきであろう。』

私は本書を読み終えた時に考えたことは、この少年は仏教でいう四苦八苦、愛別離苦(愛する人と別れなければならない苦しみ)とそれを耐えねばならない人間のあるべき姿、すなわち人間の尊厳を教えてくれたということです。

そして、原爆投下という人類史上最大の悲劇で亡くなわれた185,982名の無念さとその家族や知人の方々の深い悲しみとそれを耐える強さを感じないわけにはいきませんでした。